



Title	＜紹介＞徳永光展著『国際日本学の探究 夏目漱石・翻訳・日本語教育』
Author(s)	Binjola, Bakul
Citation	語文. 2024, 122, p. 93-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98213
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

徳永光展著

『国際日本学の探究 夏目漱石・翻訳・日本語教育』

Brinjola Bakul

本書は、日本文学的主要作品の外国語訳、ドイツにおける日本研究、日本国内における日本語教育など、多岐にわたるテーマについてⅥ部に分けて執筆されている。第Ⅰ部「翻訳者との対話」では、漱石の『心』を英訳したメレディス・マッキニーと、漱石の『坑夫』のドイツ語翻訳者フランツ・ヒンターエーダー・エムデとの対話が収録され、翻訳の問題点、また海外での日本文学作品の受容について述べられている。

次に、第Ⅱ部「翻訳研究の諸相」は、引き続き翻訳をテーマに、翻訳者自身によって、原作とは異なるオリジナルな作品が生み出されると記述しており、翻訳が起こす視点の転換性に焦点を当てている。本部では、グローバルな視点から日本研究の重要性が再確認されており、非母語話者や研究者による日本関連研究の重要性が主張されている。

第Ⅲ部である「教育研究方向の展望」は、国際研究会、国際研究誌、学会について触れながら、日本研究の国際的な存在位置に着目している。そのグローバル研究は、現在の研究だけでなく、従来の研究にも有益であると述べられている。

4章から構成された第Ⅳ部「ドイツ語圏の日本学」では、特にド

イツ語圏における日本研究の状況について論じられている。第Ⅳ部はまずRusselstein 1972: Japanologiegeschichtliche Reminiszenzenの日本語訳から始まり、ドイツにおける日本研究の歴史を洞察している。第2章では、1977年から1996年までのドイツ語圏の日本研究団体で発表された論文や記事を整理し、日本研究の進展を見ようとする試みがおこなわれている。第3章では、著者がドイツ・ミュンヘンの大学や図書館で調査した上で1996年以降に出版された書籍を考察するケーススタディーが収められている。最後に、ドイツ語圏における日本研究の現状と今後について触れられている。

2003年にポーランドのワルシャワで開催された第10回ヨーロッパ日本研究協会国際会議に参加した著者は、「日本文学と教育」という第Ⅴ部で、ヨーロッパにおける近代日本文学研究の状況を観察している。次では、1998年に北京日本学研究中心を訪問した経験と2013年にハノイ大学の大学院で日本文学史を教えた経験について述べている。最後に、山内乾史「文芸エリートの研究…その社会的構成と高等教育」（1995年10月）、また、井上孝志「高等学校における文字の単元構想の研究―『こころ』（夏目漱石）の教材解釈と実践事例を通して」（2002年）についての詳細な書評を紹介している。

最後の第Ⅵ部「日本語教育の現場」は、日本国内の日本語教育を主題に、まず初級から中級レベルの学生を教えるための方法から始まっている。次では、著者が宮崎国際大学で外国人教員に日

本語を教える際に直面した問題や自身の経験について述べている。第3章は、福岡工業大学大学院社会環境学研究科の外国人大学院生への日本語支援についてであり、留学生の授業支援、論文作成支援、日本語能力試験対策などについて記述している。第4章では、日本語教師には日本語力だけでなく、異文化理解力についても十分な見識が必要となってきたといった旨が提言されている。最後に、松田文子、奥野由紀子、松永典子、小川誉子美、河路由佳、宮原彬、および河野亜希子が書いたそれぞれの著書の書評が収められている。

全体として、本書は日本国内外の日本語や日本文学に関心を持つ人々にとって洞察に満ちた読み物であり、アジアのみならずヨーロッパにおける日本関連研究の多様でグローバルな視点を提供している。著者は研究を日本に限定することなく、日本国外での個人的な経験をもとに、より多様で幅広い研究の枠組みを提案している。

(春風社、二〇二三年十二月、四一八頁、四、〇〇〇円＋税)

(びんじよら・ばくる 本学大学院博士後期課程)